いま最も基本的な所へ立ちもどって、或る一つの事態を言語に表現する時の仕組みそのものを振り返ってみる。例えば、犬が走っている、という事態があるとする。図36aはその有様を視覚化したものである。この事態はそのまま写真に撮したり、絵に描いたりすることが出来るが、言語的には、その事態を、ある動作や状態において存す

る「もの(この場合は一匹の哺乳動物)」と、そのものにおいて実現している「こと(この場合は高速に地上を移動すること)」とに、一旦二分し、その両者を結合させて、或るものが、或ることをする(または或る状態にある)、そういう事態として言語化する、という手順を踏む。この二者のうちの、「もの」を言語化したのがいわゆる**主語**であり、「こと」を言語化したのがいわゆる**述語**である。文は主語と述語との結合によって成る、と言われて来た所以である。文は本当は、こうして描写(これを**叙述**と呼ぶ)された事態(これを**叙述内容**と呼ぶ)に対して、話者が自分との関係を決定的に表明すること(これを**陳述**と呼ぶ)によって成立する、と思われるのだが(以上の「叙述」などの用語と共に『概説』二〇三―二〇四ページ参照)、少なくとも事態の描写が、主語と述語とに分けられた「もの」と「こと」との両項を、結合統一して事態を構造的に表現する形をとることは、言語の差を超えた普遍一般的な原理と認めてよいであろう。

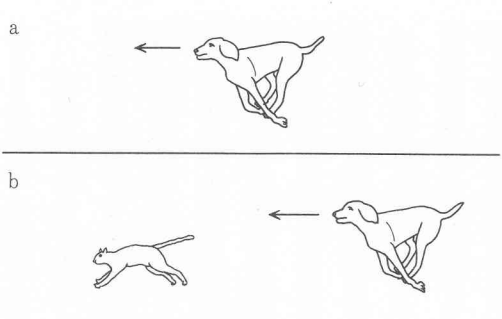

図 36

この主述両項を結合統一する統合点とでも言うべきものは、「もの」と「こと」との間にある理屈であり、論理学はそれを**繋辞**(コピュラ)と呼び、主語の表わす概念を**主辞**、述語の表わす概念を**賓辞**と呼び、主辞と賓辞とが繋辞によって結合統一されることで表わされる内容を**判断**、それを言語的に表わしたものを**命題**と呼ぶのだが、主・賓・繋の三辞がきれいに姿を現わすのは、英語で言えば

A is B.　(I am a student.)

のような場合、日本語で言えば

君は　学生　ですね。

のような場合、つまり賓辞も主辞と同様に「もの」を示し、したがって体言(名詞)の形で表現され、繋辞がbe動詞、指定の助動詞「だ」(これは「判定詞」と呼ばれることがある)の形で表現される場合であって、賓辞が動作や状態を示すものである時は、賓辞は繋辞とあい合して、一語の形で表現されることになる。これがverb、用言と呼ばれる述語であって、主辞、賓辞の統合点は述語の方に属することになる。

どうしてそういうことになるかについては、「もの」と「こと」との性質の違いを考えれば納得できるだろう。すなわち「もの」は、それ自体が一定の時間空間を占有する物体である。抽象名詞などそうでないものも少なくないが、体言の中核をなすのは、そのような「もの」である。一方の「こと」は様子が違い、「もの」のあり方、として把握されるものである。図36aで示した事態は、日本語では

犬が　走る。　(犬が　走っている。)

であろうが、「犬」の方は、「走る」といった動作から切り離して、それ自体として把握することが出来るのに対して、「走る」の方は、「犬」に限らないにせよ何らかの「もの」のあり方として把握されるものであって、「もの」と切り離しては把握され得ない、という性質を持っている。例えば図36bで示した事態は

犬が　猫を　追いかけ(てい)る。

と表現されるであろうが、述語用言「追いかける」は、追いかける「もの(犬)」と追いかけられる「もの(猫)」と

の関係、を把握した表現に他ならない。事情は日本語でなくても同じで、run after なりpursue なりは、「AがBを」そうする動作を意味とする。つまり「こと」を表わす述語用言は主語体言その他客語体言などとの関係を含んでいるのである。それは述語用言は主語その他を統一する力を与えられているということに他ならない。繋辞がverb の方に含まれる所以である。西欧の言語研究で、verb が支配する格、ということが言われ、どれだけの数の格を要求するかで「動詞価」が計られたりするのは、verb に統合の力があると考えられていることの反映であろう。ただ西欧の言語では、述語用言は、主語体言のすぐ後に置かれるのでその統合力が目立たないのだが、日本語では

犬が　猫を　追う。

のように、述語用言は文末に言われるのが普通で、この語順を線条的に辿る時は、主語(犬が)をはじめ客語(猫を)などは、事態の叙述を展開する要素、述語(追う)は、それらを一挙に統一する要素、という姿が明瞭な形であらわれる。前者が「展叙」、後者が「統叙」と呼ばれることがある(『概説』二〇三―二〇四ページ参照)のは、そういう把握の反映だが、述語用言(verb)が事態の描写を統一する要素、という事情は英語その他も日本語と同様と考えてよい。つまるところ事態の描写は、主語と述語とに事態を二分した上で結合する、という側面と、統合するのは結局のところ述語である、という側面との、二面を有すると言うことが出来よう。

渡辺 実
1926年　京都生まれ
1948年　京都大学文学部卒業
京都大学教授を経て
現在—京都大学名誉教授
専攻—国語学，国文学
主著—「国語構文論」(塙書房，1971)
「平安朝文章史」(東京大学出版会，1981)

日本語史要説　　岩波テキストブックス

1997年10月15日　第1刷発行
2008年 2月 5日　第8刷発行

著　者　渡辺実（わたなべ みのる）

発行者　山口昭男

発行所　株式会社 岩波書店
〒101-8002 東京都千代田区一ツ橋 2-5-5
電話案内 03-5210-4000
http://www.iwanami.co.jp/

印刷・三秀舎　カバー印刷・NPC　製本・中永製本

© Minoru Watanabe 1997
ISBN 4-00-026011-1　　Printed in Japan

Ⓡ〈日本複写権センター委託出版物〉本書の無断複写は，著作権法上での例外を除き，禁じられています．本書からの複写は，日本複写権センター(03-3401-2382)の許諾を得て下さい．